

最近の草地畜産について

水上 泰 介

(九州農業試験場)

MIZUKAMI, T.

Livestock-Husbandry on Grass-Land. (esp. in Aso-area.)

阿蘇外輪山において、大規模造成草地を基盤とする牧場が十数ヵ所創設されたが、古い牧場は創設後10年を経過した。この段階で牧場経営の実態と問題点を究明するため、阿蘇郡産山村のY牧場の調査を行なった。(60戸協業、草地142ha、野草地65ha、乳牛・和牛計約400頭)

調査結果

紙面の都合で、同牧場の詳細な財務諸表を掲げることにはできないが、損益計算書だけは示しておく。

この損益計算書は、筆者が諸資料、経営実態分析を通じて独自に作成したものである。この損益計算書を次のように読むことができる。

①売上総利益が黒字として出ている。これは純技術レベルでは牧場運営が軌道に乗ったことを意味する。(売上原価に見合う販売実績のない牧場、つまり売上総利益段階で赤字の牧場も多い。)

②営業利益段階で赤字になる。これは、協業経費が賄えないことを意味する。

③それで牧場創設後10年経過しても、営業外収益にみられるとおり、多額の諸助成を受けている。しかし、これも金利支払、乳牛事故損で無に帰している。

以上のように、概観したのち、次のような補足事項でこの損益計算を見直す。

④この牧場は協業参加者(入会権者)に次の給付をしている。

ア. 地代支払い。これは損益計算書中賃借料である。

イ. 牧乾草配給。約140tの牧乾草を無料で配付している。これは生産原価で約160万円、市価では4~500万円となる。

ウ. 和牛の予託をうけて放牧している。この費用が、計算上約280万円であるが、実際には39万円しか予託料を徴集してない。

エ. 損益計算書中の役員報酬、同じく生産原価中の職員給与・労務費(合計550万円)は地元で現金で落ちていることになる。

⑤結論、牧場単独の計算では赤字であっても、地元の和牛振興など波及効果を計算に入れる、つまり地域全体(牧場をふくむ)の真の損益を考えると、この牧場は成功したと言える。

損益計算書(49年)

A 営業損益の部			
営業収益			
牛乳売上高	28,741,129		
育成牛売上高	4,689,360		
乾草売上高	1,490,760		
和牛予託料	390,000	35,311,249	
営業費用			
売上原価		32,043,520	
○売上総利益		3,267,729	
一般管理費及販売費			
役員給与	2,060,000		
旅費	163,693		
通信費	54,929		
研修費	39,700		
接待交際費	210,910		
会議費	156,765		
厚生費	552,955		
手数料	627,887		
租公課	223,080		
保険料	46,771		
雑費	492,049		
賃借料	2,415,000	7,043,739	
○営業利益			△ 3,776,010
B 営業外損益の部			
営業外収益			
国営附帯補助金	378,000		
県村補助金	1,830,000		
全競補助金	4,880,000		
共済金収入	816,875		
受取利息	330,926		
出資配当金	340		
雑収入	1,182,248	9,418,389	
営業外費用			
共済掛金	1,377,213		
支払利息	3,261,392		
支払退職金	200,000		
成牛事故損	840,000		
育成牛事故損	1,718,496		
育成牛(財産)処分損	777,166		
機械廃棄損	65,000	8,239,267	
○経常利益			△ 2,596,888